

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

2
2026
No.725



特集

卒業おめでとう

生活年齢の節と卒業 石垣雅也

連載

息子と歩く 千葉桜 洋

- 1 人として 佐野竜平
- 2 【インタビュー】いま語りたい 心の窓を広げて eri
- 6 教員のはじめの一步 桜井佳子
- 8 心に種をまく 安田菜津紀
- 9 あなたに届けたいこの一冊 安達敬子
- 10 この子と歩む 今野佳代子
- 13 進め！ 推し活道 長崎瑞生
- 14 息子と歩く 千葉桜 洋

みんなの ねがい

2026年2月号
No.725

特集 卒業おめでとう

- 16 感謝の気持ちを花束に 前原真奈美
- 18 あなたはあなたのままでいい 式地愛子
- 20 安心できる居場所で仲間とともに大きくなろう 鈴木智代子
- 22 18歳までの自分づくりとこれからの自分づくりへ 中島芳明
- 24 生活年齢の節と卒業 石垣雅也



- 27 みんなのひろば
- 28 私ときょうだい 水谷智子
- 30 子どものミカタ 松島明日香
- 32 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
- 36 シリーズ 18歳 國本真吾
- 38 暮らしの場は今 田村和宏
- 40 実践にいかす障害と医療 全 有耳
- 42 ニュースナビ 岡山・特別支援学校高等部応募条件の改善 圓戸伸一郎・道廣理恵
- 44 実践の魅力 鶴山祐子
- 47 全障研の支部ニュース、紹介します 松元 巖
- 48 BOOK／編集後記

裏表紙 おいしいひととき 佐々木政一

デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙のこぼ

寒さが厳しいこの時期は出かけるのが億劫になるが、日差しが穏やかに照りつける「冬日和」と呼ばれる日は、空気も澄んでいて僕も地方に足が向く。風は冷たいが日向にいとやがて来る春の気配を感じられる。

房総の山間部の野道で手押し車を押すおばあちゃんに会った。僕が好きなフォトジェニックな組み合わせだ。手押し車はおばあちゃんにとっては万能の必需品であり、それぞれの趣味やこだわりが詰まった大切な宝物である。自然に目が合い、声をかけて2、3枚ほど写真を撮らせてもらう。今日は寒いけどいい天気だねえ、どうぞお気をつけて。眩しい冬日和の日差しのなかをゆっくりゆっくりと進む、手押し車とおばあちゃん。空は青く澄み渡っていた。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。

人 として

「人馬のウェルビーイング」って何？

日本障害者協議会理事

佐野竜平さん



「人馬のウェルビーイング」という言葉を聞いたことがありますか？ 以前から世界保健機関（WHO）憲章に、「満たされた状態」と訳されるウェルビーイングという言葉がありました。この言葉が世界的に再注目され、広く一般的に普及したのは、2010年代以降とされています。

実はそれよりも先、私が一番最初に馬に関わったのは、北海道にいた30年近く前のことです。ある日、障がいのある児童・成人と馬が触れ合う場をつくろうと、当時の上司と一緒に手探りながら馬小屋を作り始めました。その方とはとにかく動物と人のつながりをひたすら追い求めていました。その頃、まだ国際獣疫事務局によるアニマルウェルフェアに関する規約はありませんでした。

作業がなかなか大変だったので、牧場農家の方に応援を頼みました。すると「うちで雇用している知的障がいと自閉スペクトラム症のある人のすごさを知っているか？ 動物が妊娠しているかどうか初期段階から認識できる専門家だ」と話してくれました。顔認証などまったくなかった時代で、私の目にはあらゆる個体がほぼ同じに見えていました。実際に障がいのあるスタッフが見極めているのを目の当たりにし、その高度な専門性と動物の健康面を細かくケアできる人としての器のちが

いを思い知らされました。

時を経て、「人馬のウェルビーイング」活動に関わるようになりました。乗馬に限らず、「人と馬の接点を一つでも多く増やすこと」がその本質的な意味と受けとめています。この想いは、まさにあの北海道での日々が原点になっています。

現在、東南アジアにおける障がい者と馬介在活動プロジェクトに従事しています。日本では武士の軍馬、農耕・運搬手段などとして馬が存在してきましたが、東南アジアでも馬はコミュニティに密着しています。例えば、イスラム教の経典であるコーランには、人の生活に欠かせない尊く、共に生きるパートナーとして馬が記述されています。

障がい者にとって地域のリソースである馬との接点を増やすことで、生活にまた一つ新たな彩りを増やせないかという想いが、この活動の原動力です。「学術的に数字で根拠を示せ」と言われたら悩んでしましますが、馬との出会いは人の可能性を広げる触媒のようなのだと信じています。人馬一体の感覚を知ると、そこには必ず希望に満ちたさまざまな人間ドラマがあることを申し添えます。

さの りゅうへい／法政大学現代福祉学部教授。日本障害者協議会理事・広報副委員長。専門はアジアの障がい分野における国際協力。現地の政策・実践に従事

教員のはじめの一步

第11回

子どもの心 見つめてますか？



全障研東京支部

桜井佳子

さくらい よしこ／公立小学校
教員。1989年より肢体不自由
特別支援学級で11年間、その
後26年間知的障害特別支援学
級を担任

障害による困難に加え、家庭の問題などで厳しい日々を送る子どもたち。年々増加し、問題が深刻化していると感じます。荒れる子どもたちを目の前に、私たちはどうしたらよいのでしょうか。

休むことはいいことだ

児童養護施設で暮らすかずくんは、言葉で気持ちを表すのが苦手で、頻繁に暴れ、物を倒したり壊したりしてしまいます。それが友だちの大事な物でも「おれは悪くない！」と絶対に謝りません。

指導にあたる仲間みんなで悩み、話し合いました。そして謝ることを目標にするのをやめました。まずは周りの人に心を寄せること、そしてかずくんが自身に向き合えることを目指そうと決めました。

私たちは学級の子どもたちに「したことは悪いこと。でもかずくんは悪い子ではない」と伝え続けました。そしてかずくん自身が自分の心を見つめられるように話し合いました。その時は一瞬一瞬が勝負。乱暴な言動の奥に隠れたかずくんの気持ちを考えながら「つらかったね」「ほんとうは〜と言いたかったんじゃない？」「かずくんの気持ち、わかりたいよ。かずくんが大事だよ」と語りかけました。

イラスト 勝倉大和

特 集

卒業おめでとう



年が明け、保育園や学校などでは、卒業に向けたとりくみが本格化する時期を迎えます。

子どもたちにとって卒業とは、心もからだも成長した自分を確かめながら次のステージにあゆみをすすめる節目のとき。「小学生になったらあんなことしたいな」「中学部に上がったらこんなことをがんばりたい」というねがいを持って大きく成長したり、慣れ親しんだ場所や人と離れるさみしさに揺れる姿を見せたり。また、青年たちにとっては、学校から社会にはばたく、これまでの人生のなかで最も大きな変化のときです。

そんな節目の時期に、学校や家庭ではどんなドラマが起きているのでしょうか。子どもたち、青年たちはどんな姿を見せているのでしょうか。高等部などの卒業を目の前にして、「18歳で社会に出るのはあまりにも早いのでは」「もっともっと友だちといっしょにいたいのに」と、「卒業」という言葉に複雑な思いを抱く人もいるかもしれません。卒業を前にした家族の思い、子どもや青年たちの揺れる心をていねいに受けとめる実践を通して、一人ひとりにとっての卒業のかたちを考えたいと思います。

心から「卒業おめでとう」と言えることを願って――

安心できる居場所で 仲間とともに大きくなろう ～卒業の季節に思うこと～

東京 元特別支援学級担任 鈴木智代子



「どんぐり学級の思い出は、みんなで行った宿泊学習と、力を合わせてがんばった劇です。リーダーになってがんばりました。」

卒業式当日、ステージの中央でくに君は、はつきりとした声で呼びかけの言葉を伝えました。六年間をともに学び一緒に過ごしたあきら君と、呼吸を合わせながら堂々と話す姿には、これまでの歩みが表れていました。入学した頃のくに君は、新しい環境に心が追いつかず、落ち着く場所を見つけれない様子がありました。気になるところを確かめるように廊下へ出たり、教室の中をあちこち見て回ったりしながら、自分のペースで少しずつ学校生活になじもうとしていました。私はその頃のことを思い返しながら、前を向いて堂々と立つくに君の姿に、確かな成長を感じたのです。

特別支援学級で ともに過ごした六年間

くに君は、特別支援学級の仲間や教師との関わりの中で、ゆつくりと、確実に成長してきました。

私たち担任は、子どもたちがおとなとの信頼関係のもとで安心して過ごし、仲

間と関わりながら共感的な自己肯定感を育てられるような学級づくりを大切にしています。教科の学習では、ひとりひとりが理解しやすいように教材や教具を工夫し、生活単元学習や自立活動では、行事や畑の作業、調理学習などを通して、学びを生きる力につなげられるようにしています。

こうした生活や学習を積み重ねる中で、くに君は、次第に周りを気にかけて行動することが増えてきました。六年生になると、低学年の友だちに「くに君、かっこいい!」と慕われることで自信をもち、学級のリーダーとして、活動を中心になって進める姿が見られるようになりました。

卒業に向けたとりくみのねらい

卒業に向けて行った一連のとりくみには、次の三つのねらいがありました。

- ・ 小学校生活を振り返り、成長した自分、がんばった自分に自信と誇りをもつて進学できるようにすること。
- ・ 学級や仲間との関わりを大切に思う気持ち育てること。

・ お世話になった人たちに感謝の気持ちを伝えられるようにすること。

生活年齢の節と卒業

北海道教育大学釧路校

石垣雅也



生活年齢の節

発達の節が子どもの中にあるものだとなれば、「生活年齢の節」はどちらかといえば子どもの外側にあるものと言えるのではないだろうか。子どもたちは、一日いちにちを人生の主人公として暮らしていきます。そして、その365日の積み重ねが生活年齢として一年にひとつずつ増えていきます。たとえば、その年齢が一つ増える日を「誕生日」として祝うことによって、生活年齢にひとつの節ができます。本誌編集部から依頼された「生活年齢の節と卒業」というテーマの生活年齢をこのようにとらえて、その節と卒業について小学校教員だった私の経験も交えて考えていきたいと思っています。

生活年齢を一つの節として表す時、みなさんは何歳を思い浮かべるでしょうか。このテーマをいただいた時、真っ先に「15歳」が思い浮かびました。通常学校教育の運動の歴史で

は、「15の春は泣かせない」という1960年代の高校全入運動のスローガンがあります。障害児教育の運動では、高等部希望者全入運動とその到達点（越野2014）としては、「花開け！15の春」として「青年期教育としての高等部教育を創造する実践運動」へと実を結んできました。

卒業が切れ目や単なる区切りではなく「節」となるには、これらの運動が切り開いてきたように、その次の世界が豊かに用意されていなければなりません。それと同時に、（次の世界の前の世界としての）今の世界がその締めくくりとして豊かに用意されなければなりません。

奪われた卒業という節目

そのことを強く意識させられた忘れない「卒業」の年があります。それは2020年3月に卒業を迎えた子どもたちと、その卒業です。2020年2月27日、私たちはニュー



第11回 自制心とは我慢すること ではない

この連載では、さまざまな実践者が
それぞれの実践を通して、子どもの
発達や魅力について語ります。



滋賀大学 松島明日香

◆「外」と「内」の世界で揺れる

「オマケノオマケノ、アト5カイ…」、
「オマケノオマケノオマケノ…」しゅう
じ君の声がグラウンドに響きます。特別
支援学校に通う小学部5年生のしゅうじ
君はグラウンドの草むしりに夢中です。

先生のお話では、最近、次の活動への切
り替えがむずかしく、草むしりも始める
となかなか終われなくなっているとのこ
とです。私は発達相談員として学校や作
業所の発達診断・発達相談に携わってい
るのですが、しゅうじ君とは小学部1年
生の時に出会い、定期的に学校での様子
を見させてもらっています。

「しゅうじ君、草むしりやめて焼きそ
ば作るよ」と先生が声をかけます。「ア
ト10カイ」としゅうじ君。「1回、2回、
3回：9回、10回！はい、おわりー」
と先生が切り上げようとしますが、しゅ
うじ君は「オマケノ5カイ！」と粘りま
す。そのようにあと5回追加したら、冒
頭のように「オマケノオマケノ」「オマ
ケノオマケノオマケノ」と続きます。先
生は無理強いすることなく、しゅうじ君
の「オマケ」コールにずっと付き合っ
ています。「たくさん、草が抜けてくねー」、

「そういえば、けんと君は焼きそば作っ
てるんやろか。塩焼きそばにするんか、
ソース焼きそばにするんか悩んでたな
ー」と声をかけると、しゅうじ君の手が
止まります。「しゅうじ君はソースやっ
た？ 塩やった？」に「ソース…」。「そ
うそう、ソース焼きそば作るんやっ
た。なんか、焼きそばのいい匂いがして
きたなー、しゅうじ君もそろそろ手を洗
って、焼きそば作りに行く？」「…イク」
と土だらけになった手を払いながら、教
室に入るしゅうじ君でした。

発達の4歳頃の質的転換期をむかえ
ると外の世界（相手の気持ちや場、状
況）に気持ちを配りながら、考えなが
ら、意識しながら、内の世界（自分の思
い）との間でまとめあげるようになって
いきます。いわゆる自制心の形成と言わ
れる姿です。その過程では「ケレドモ、
ケレドモ」と外の世界と内の世界の間で
揺れながら、少しずつ自分の気持ちに折
り合いをつけようとし始めます。しゅ
うじ君も発達診断の結果、ちょうど4歳頃
の発達の質的転換期にさしかかっている
段階であることがわかりました。相手の
「こうしてほしい」という〴〵（意
図）と自分の「こうしたい」という〴〵

ソーシャルワークって なんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

第11回

「実践」の「ふりかえり」と「綴ること」 そして「スーパーバイズ」の大切さと



日本福祉大学
木全和巳

きまた かずみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』（クリエイツかもがわ）など

「実践」って何ですか？

もう10年以上前の出来事です。私がソーシャルワークの演習の中で何よりも現場の「実践」が大切と何度も強調するからなのでしょう、ある学生から「実践って何ですか？」と素朴に尋ねられたことがありました。学生の頃から、社会的運動や政治的活動に参画していた私は、「実践と理論との関係」とか「理性的認識と感情的認識と実践との関係」とか、こんな議論が大好きだったことを思い出しました。そして、そういうえば毛沢東が1937年に書いた「すべての認識は実践に由来する」と主張する『実践論』も読んだことがあったなあと思い出しながら、どう応答しようかと、少し悩んだことがあります。その時は、学生のみなさんに「何だと思う？」と問い返し、他の学生さんたちにも「とても大切な問いなのでみんなで考えてみよう」と語りかけ、「私も次回までにもう一度、調べて、考えて、それを話してみるね」と伝えました。この時に作ったメモの一部を紹介します。

「保育、教育、社会福祉、当事者運動など、私たちは、人間が外界（自然、社会、他の人々）についてもっている自らの知識にもとづき、これにハタラクかけ、変えようとする努力」（久野収・鶴見俊輔編『哲学・論理用語辞典』（増補第10版）三一書房、1985）である『実践』をしています。特に私たちが行っているのは『社会的実践』であり、共同的で『対象的―目的意識的な活動』です。だから、こうした活動は、意識的に『綴り―ふりかえる』ことを通してはじめて意味と



価値をもった「実践」といえるものになると思います。この目的には、こうあったらいいなあという未来へのねがいが宿っています。そして、こうあったらいいなあというねがいを共有すること、わたしたちは、つながりあうことができます」

加えて、「実践」概念には、目的意識性をあまり強調しないブルデューの「習慣行動（プラティーク）」やギデンズの「ふりかえり（レフレクション）」を重視した「日常」の「実践的意識」などの考え方も大切であると伝えました。「実践」という行為は、なんらかの構造に影響をうけながら、そしてこうした構造に制約を受けながらも、またこれをうまく使いながらもなされるもので、時に構造を構成するものですね。このように「実践」という言葉は、「理論」とともに、大切にしたい何とも奥の深い言葉です。

実りある 一步一步の足跡の連なり

この時に、尊敬している漢字研究の第一人者、白川静さんの『字通』をひもといてみました。

「実」は、旧字は「實」です。宀（べん）＋貫（かん）で構成されています。宀は屋根を意味します。貫は貝を綴った形で、ものを貫くことを意味します。合わせて、充実の意から誠実・実行の意となります。「踐」は、旧字は「踐」です。蔑には薄いものを重ねる意があります。足跡の連続することという意味です。まとめると、「実りある 一步一步の足跡の連なり」のことです。足跡が実りあるかどうか。このことを検証するためには、「立ち止まって、足跡をふりかえる

こと」をしなくてはなりません。私たちは、「実践」というと、何かに働きかけるという活動をしていることのみに注目しがちですが、その本質は、「ふりかえり」にあります。私は、「ていねいなふりかえり」こそが、実践の本質だと学びました。

学生さんには、「綴られていない『実践』は『実践』と叫ばない」ということを強調しました。「やりっぱなしは『実践』ではないよ」とも。この時に、読まれることになる実習の記録のものになる、働きかけた子どもたちや人たちの具体的なやりとり、相手の内面の想像、自分の気づきやおもしろいことやまなびをその都度自分の実習ノートに書き留めることの大切さも伝えてみました。

もう40年以上前の教育大学の学生だった頃です。附属中学校に初めての教育実習に行きました。その時、指導教員だった方に、「島小教育」の名で教育史に残る実践家、斎藤喜博を読みなさいと強く勧められました。『授業入門』など読んでいたのですが、実習後、古本屋で全集を買いました。自分でもまじめな学生だったと思います。その一節です。

「教育実践家の幸福の一つは、実践がわれらに無限の教育問題を投げかけてくれるということである。実践によってわれわれ自身の学問ができるということである。実践上の問題は実践家でなければとうてい得られない。またその解決も実践をとおしてでなければ、大部分はなされないものである。ゆえにつねに問題を実践のなかに求め、方法的にそれを解決するということは、教育実践家の信条でなければならない」



第 11 回

【まとめにかえて①】 青春を権利として 保障できる社会へ



鳥取短期大学

國本真吾

全専研研究集会

昨年11月、静岡県で全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会（以下、全専研）の研究集会が開催されました。障害青年が18歳以降も「学びたい」という声をかなえる場となる、特別支援学校高等部専攻科の設置拡充を求めてきたのが全専研です。学校としての専攻科設置が進まないなかで生まれたのが、障害福祉サービスを活用した形の「福祉型専攻科・大学」のとりくみでした。全専研の研究集会では、学校や福祉型専攻科の実践を共有していく面もあります。が、近年は参加者の半数が18歳以降の学びの場に通う青年たちで占めるようになり、全国の青年たちの交流の機会としての役割も果たしています。

小さなドラマの積み重ね

研究集会初日は、全国から参加している学校・事業所のリレー紹介から始まりました。司会

進行は、開催地の福祉型専攻科に通う青年です。開始の時間を迎えて一同が司会の声に集中しようと静まり返った瞬間、大勢の参加者を前にした緊張からか、彼が第一声を発するまでに若干の間が生まれました。それはわずか数十秒のことでしたが、一点を見つめて自力で呼吸を整える姿に、その場にいた全員が「がんばれ！」というエールを心の中で送った瞬間でもありました。

そして、開会を告げる宣言を発すると、順々にリレー紹介で登壇する人々を紹介することができました。司会の大役を終えた後、彼に労いの言葉をかけましたが、クールではあるものの額に汗を滲ませて、どこかやりきった感に満ちた表情であったのが印象的でした。

何気ないようなエピソードかもしれませんが、専攻科実践のなかで「心地よい負荷」の経験が語られることがあります。これまでの日常にはない晴れの舞台で、大勢の人を前にして進行



ニュースナビ

2026年2月号

News Navi

すべての高等部生がスクールバスを利用できるように 岡山・特別支援学校高等部の応募条件の改善を求める運動

問題の経緯と運動の成果

岡山県高等学校教職員組合障害児学校部

圓戸伸一郎

岡山県における高等部教育は、1984年の「岡山県心身障害児（精神薄弱）にかかわる後期中等教育研究協議会」による「心身障害児（精神薄弱）の後期中等教育の在り方について」（「84答申」）で規定されました。この「84答申」では、「精神薄弱児」の進路を「一般就労」「保護的就労」「保護の中での生活」の3つの社会生活参加に分類し、高等部教育の対象を、家庭にあって将来一般就労、もしくは保護就労可能な者に対してのみに限定したことで、施設入所者や障害の重い子どもたち、訪問教育生は高等部教育の対象から除外されることとなりました。

実際、「84答申」以降の養護学校高等部の募集要項には、応募資格として「身辺処理が自立し、集団生活への参加が可能な者」と「生活の基盤が家庭にあり自力で通学が可能な者」（後に「自力で通学が可能な者」という2つの条件がつけられました。以後40年あまり、知的障害部門の本科普通科では2つの条件が、肢体不自由部門の本科普通科では「自力通学が可能な者」の条件がつけられてきました。途中、高等部希望者全入を果たし、1990年代に教育長が何度か条件の見直しに言及したものの、これ

らの条件がなくなることはありませんでした。また、この条件により、スクールバスの利用は義務教育段階の児童生徒に限られることとなりましたが、後に席に空きがあれば高等部生徒も利用できる状況が生まれ、県教委もそれを例外的に認めていたため、自力通学条件は有名無実化して久しくなっていました。

岡山県高等学校教職員組合（以下、高教組）は毎年、この入学選抜の応募条件となっている自力通学が可能という条件撤廃、自力で通学できない生徒もスクールバス利用ができるようにとの陳情を県議会にあげてきましたが、ことごとく不採択となっていました。そのようななか、2024年秋に、倉敷市の保護者有志が「障害の程度が重く、例外的にスクールバスの利用が認められている高等部の生徒全てが、スクールバスを利用できるように」との署名活動を行うとともに議会陳情を行い、マスコミでも取り上げられました。24年11月の県議会文教委員会では、高教組の例年通りの陳情とともにこの保護者有志の陳情と、提出者のちがう同じ内容の陳情が並行して審査されることになりました。審査の結果、高教組の陳情は不採択、保護者の陳情は全会一致で採択というねじれた状況が生まれました。

しかし、この陳情採択を機に県教委は動き始め、25年2月に「県立特別支援学校スクール



町のパン屋さんとして

石川 ひろひろ福祉会
ワークショップひなげし

佐々木政一

無認可小規模作業所の頃、近所のパン屋さんからパンを仕入れて販売し、お客様にパンのことを聞かれ、答えられずくやしく情けない思いをしました。「いつかは自分たちで焼き立てのおいしいパンを作りたい」と強く決意することがきっかけです。

いわゆる「修業」の頃には幾度も失敗し、昔かたぎの職人の方から叱咤激励をうけながらパンを作ってきました。

あれから21年、私たちの作るパンも安定し、図書館の喫茶スペースの outlet にお声がけいただけるまでになり、販路が一気に拡大しました。

今では「町のパン屋さん」と言ってもらえるようになり、働く仲間の自信となっております。

